サークルまでい飯舘村バスツアー感想集

＋－＋－＋－

連絡はしているが、直接お会いして、話すのは初めて。おじまふるさと交流館で、田尾さん、宗夫さんと打ち合わせ。有意義だったと思う。

懇親会では、宗夫さんから、帰村と新しい村づくり／何を目指すのかの説明、田尾さんの補足説明を受ける、第二部では参加者の自己紹介、思いを話し、懇親を深めることができた。

佐須のふくしま再生の会飯舘事務所では、ハウス、田圃などサンプル採取場所見学、宗夫さん、田尾さん指導による土壌採取、稲採取の実習、見学。夏の天候不順で稲の実りが心配されたが、稲の穂に実りが付いているので一安心。酒米、夢の香は緑のままで、実入りが少ないようで、収穫できるのか心配だ。

新しい佐須公民館、旧佐須小学校を見学、ハウスで作業をしていた菅野永徳さんが来てくれて、小学校の歴史の話をうかがう。古い校舎だが、それだけ思い出の詰まったところなのだろうな。壊してしまうと、そんな思い出までなくなりそうで-----。

山津見神社でも、火曜日で休みの日であったが、禰宜さんもちょうど来られていて、案内をしてもらう幸運。おおかみ天井絵を見学。狼が大神である不思議。

前田を経由してあいの沢への小径は緑に溢れて美しかった。

小宮マキバノハナゾノでは、上の畑で作業していた大久保金一さんの話“親父が国有林との境に植えた一本杉が大きくなった。別れの一本杉という歌があったが、これからは出会いの一本杉にしたい”復興再生は、箱物を作ること（だけ）ではなく、一つ一つの出会いを大事にすることから始まるのではないか？人と人の出会いだけでなく、人と村の歴史、人と自然との出会いも大事にすることから。

私にとって、飯舘村は、親父の出身地の愛媛の山奥の城川町（土居村、魚成村、黒川村の昭和の合併でできた町、今は平成の合併で西予市の一部になっている）とイメージがダブる。飯舘村に比べると面積も狭いが、水田風景が広がり、森林に囲まれ、牛、豚の畜産、地産のハム等も創っている。田植えの前には、毎年どろんこ祭りがあり、子供たちが田んぼに入って、泥んこになって遊ぶ。何のことはない、これは子供を遊ばせて、雑草取り、代掻きをさせているのではないか？　一石三鳥？　また、毎年、かまぼこ板の絵展覧会を行って、全国から1万点以上の応募がある。道の駅の建物は少し大きな八百屋のようだが、地産の野菜、山菜、栗などであふれている。

飯舘村にはユニークなまでいライフいいたての歴史がある。までい（真手、両手）、つつましく、心を込めて、丁寧に、村と村の人々の暮らしの再生を図ってもらいたい。そして、その再生に自分の感性、能力を生かして、協力したいと思う。　　伊井一夫

＋－＋－＋－

わかる。
　村役場の復興対策課の方から村の復興のための対策、いろいろなかたちでの営農の再開に対する補助金や支援を具体化していく話を伺う。
一応の資金はあるが、それを活用していくことの難しさがうかがえた。
　その後長泥のバリケード前で、道路わきの草むらに線量計を置いて測定してみる。予想していたが他の地域とは数値が全然違う。草むらの中に咲いている花々の可憐な無垢な姿がせつなかった。
　佐須の新しい事務所は、二階天井の梁に旧牧舎の梁を活かして使ったとのこと、佐須の生活がちゃんと繋がっていることを確かめられる気がしてうれしかった。
一階のキッチンで千恵子さんがきゅうりを刻んでいる姿をみると、なんだかほっとした。
ああここはやっぱり佐須のおうちだ。その家の主婦が家事をしているのが、こんなふうに愛おしく落ち着いて感じられるのは、本物だからだ(へんな表現だけど)と心に温かいものが満ちてきた。
　小宮では金一さんが子猫4匹にそれぞれ〇〇姫と名づけて可愛がっている。
家の中を動き回るたくさんの命に囲まれて生活するのは、なによりの力づけと安らぎになっているようだ。金一さんは、みんなの到着が遅れたので「なんだか見捨てられた気がした。」と言っていたが、３，4年前の金一さんだったらとても言えなかったと思う。さまざまの人たちとの交流や、やりとりが、金一さんのうちに秘めていた想いに言葉を与え表出する力を生み出しているのだと思った。
　今回は村の現場をみるということでしたが、こうして振り返ってみると、私はやはり人を感じてしまうんだなとあらためて自覚しました。ほんとうにささやかな、ささやかな活動（といっていいのかな）しかできないけれど、自分がキャッチしたものは、大切に大切にして、村のひとたちとの交流に活かしていこうと思っています。

　さまざまなアレンジ、心配りをしてくださった田尾さん宗夫さんありがとうございます。

伊井尚子

＋－＋－＋－

うか。線量の高い長泥・比曽地区を回って、そこに住む義人さん啓一さんたちの苦悩は如何ばかりかと改めて想いました。

今回は見ませんでしたが、多くの訪問者を受け容れている霊山センターの活動があります。定常的に放射線量の村内全域の測定作業を続けています。　２０行政区の土壌の放射能測定作業も村民を主体にして始まりました。　ほかに、牧場再開をした人、花卉栽培を始めた人、ひまわり街道構築活動、・・・等々の動きを耳にします。

総括しますと、大災害に対して“様々に対処する人間の多彩な諸活動の積み上げ”が私に今後への大きな期待を抱かせてくれました。冒頭の“ネジまき直し”の感想はそれが所以です。

宇野義雄

＋－＋－＋－

ろう田圃を隠している。何とも悲しい。事故直後の村は放射能の線量は高いのに、緑豊かで綺麗な村に見えた。しかし今はフレコンバックの山によって放射能被災が可視化されていると思った。国からは多額の復興予算が投じられていると聞いた。全天候型グランドの設置、綺麗な小中学校校舎の建設が進んでいた。都会的な施設を建てて、飯舘村のまでいな暮らしに添っているのだろうか？現実の災害を見えないものにしようとしているのでは？　そんな疑問を感じた。

帰村を決意された方が『ゼロからの出発ではなく、マイナスからの再生ですよ。』『孫の代、その次の代が戻って来られる様に自分は頑張る』と言っておられたのを思い出す。こうした村の方の志を応援してサークルまでいの活動を続けていきたいと思います。　　齋藤富子

＋－＋－＋－

車窓からは凄く立派な家もたくさん見え、荒れ果てた家もたくさんありました。途中、バスの前をイノシシが横切りました。除染の人が沢山村に入ってからイノシンを捕獲出来ずその後の採取は止まったままでしたが、世代交代したイノシンの線量はどうなってるのか気になりました。太陽光発電の設備も見えました。車を走らせながら、なぜか新たに戻って来て動いてる人は見えなかったです。何戸かは新しい方が帰村されたと思うのですが。飯舘村は家と家の間が凄く離れているのですね。帰村された方たちの交流は？と気になりました。会えたのは案内して頂いた田尾さん、役場の職員の方、山津見神社の権禰宜さん、再生の会で復興に頑張っておられる菅野宗夫さん、小学校跡の公民館を説明して頂いた菅野永徳さん。永徳さんは帰村前の報告会で「年を取ってこれから家に戻ってきてどのような生活をしていけばいいんだかな」と話されてました。山津見神社の歴史や文化をとても大切に考えていられました。

村の再生を引っ張っていかれる方々と帰りたくても帰れない方、一言で帰村と言っても言葉通りにならない課題が凄く凄くいっぱいなのだと思えました。

宗夫さんから「見える化」の大切さを有難うと言って頂き、せめて農学部地下のサークル室で飯舘村から送られる土壌や米、植物のバイアル作りを頑張らなくてはと背中を押して貰った感じがしました。

田尾さん、宗夫さん、忙しい中を色々と案内して頂き本当にありがとうございました。不謹慎な言い方かも知れませんが、こんな大変な状況にあっても、全体的にみて飯舘村はとても豊かな村という印象を受けました。日本で一番美しい村の一つだった事が頷けました。どんなに長い時間がかかろうと飯舘村は再生を果たしていくのだろうと思えました。私はどこまで見られるのだろうと。

土居千代

＋－＋－＋－

放射線災害への憂慮

今回のバス旅行で飯舘村を見学すると、至る所農作地に「汚染土土嚢」が積上げられていた。説明では、これは一時的な処置で、いずれは県外に運び出すと言っているが、実情はこの村には現在「生業」がないので、「汚染土土嚢」を自分の田畑に置いてもらう事による収入がこの地の農家の収入だと言うのだ。とにかく当初は当局が思っても見なかった状況が実際には展開していると言う。

取残された災害汚染

政府は農地や宅地に対しては、表面汚染土の除去を強く推進している。しかし、森林原野に対しては樹木や表土の汚染除去は行っていない。ところがこの地域は、降雨や降雪で放射性元素が滴下して地下水や灌漑溝に入り、最終的には耕作地で農作物に取り込まれることになると考えられる。このような流出放射性元素の量がどれほどかは、いろいろの条件で実測して見なければ、言明することは出来ない。この研究は農学部博士課程のかっこうな論文課題になると思う。原発災害が起こって六年も経過したので、放射能半減期の理論からすれば、新奇性がない研究かも知れないが、必要な検討ではある。

再生の会のふところ

再生の会も財源確保の名案があれば、それに越したことはない。放射線汚染の問題がなくても、米や山菜などを販売することに困難があると言うならば、ネット販売やバスツアでデータ上問題がないことを説明した上で、会員扱いにして販売すれば問題はないと考える。私は「飯舘村の米」が特上米だからと言う理由で一キロ千円も払うほど裕福ではない。宅配企業と提携して低廉な宅配料金が実現出来れば、「再生の会」に貢献すると言うことで、一キロ千五百円くらいで会員販売したら良いと思う。また正月用に切餅または団子餅にして売ることもできるだろう。要するに、再生の会の活動を支援する道具として使ったら良いと思う。それには、頻繁に現地に戻った人々の情報を発信することが必要だ。場合によっては、季節の飴など「甘いもの」も出来る。

徳川文武

＋－＋－＋－

＋－＋－＋－

かったと思います。
本当にありがとうございました。　三浦優子

＋－＋－＋－